



報 館

玄洋138号

令和3年1月1日

発行

一般社団法人
玄洋社記念館郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6番36号

西公園ハイツ201号

電話 (092) 762-2511

FAX (092) 762-2502

玄洋社憲則

- 第一条 皇室ヲ 敬戴ス可シ
第二条 本国ヲ 愛重ス可シ
第三条 人民ノ権利ヲ 固守ス可シ

今号の主な内容

- ▽「筑前琵琶保存会」が定期演奏会を開催。前会主を追悼 3面
▽連載「西郷隆盛は征韓論者にあらず」 4面
▽賛助会員芳名録 5面
▽神社が初詣で分散参拝を呼び掛け 5面

中野正剛先生顕彰祭

コロナ禍で中止に

福岡が生んだ硬骨の政治家、中野正剛先生の顕彰祭が、昨年は新型コロナウイルス感染防止のため中止された。

顕彰祭は、例年、中野先生のご命日、十月二十

七日に近い土曜日に斎行されてきた。昨年は、年初から始まった新型コロナウイルス禍の終息が見えず、顕彰祭を主催する「中野正剛先生顕彰会」は、中止を決めた。

止は初めてのことに。

—シカモソノ真相如何ハタダ天コレヲ知ルノミ—

中野先生顕彰碑
碑文を紹介

「中野正剛先生碑」は玄洋社記念館創設者の進藤一馬先生（明治三十七年—平成四年）が主宰する「正剛会」によって正剛先生十三回忌の昭和三十年の三月二十七日に建立された。

表に同郷の盟友、緒方竹虎先生（明治二十一年—昭和三十一年）の筆で「中野正剛先生碑」。背面に近代日本の代表的ジャーナリスト、徳富蘇峰氏（文久三年—昭和三十三年）の文、進藤先生の書で碑文が刻まれている。

碑文は十五行千三百余文字。日刊新聞の記事に

中野正剛君ハ明治末期ヨリ大正ヲ経テ昭和中期ニ至ル我ガ日本ノ産出シタル不羈卓犖（ふきたくらく）ノ好男児ナリ。君ノ家ハ福岡藩士、幼時黒田武士ノ雰囲気中ニ成長シ、ソノ教養ヲ受ク。君ノ母校ニアルヤ学業儕輩（せいはい）ニ冠タリ。進ンデ官学ニ入り高第（こうだい）ヲ取ル。立身出世手ニ唾シテ得ベキ

ナリ。シカモ君ヤ自ラ好ンデ早稲田大学ニ赴ケリ。学成ルヤ朝日新聞記者トナル。君ハ文章雄健、識見透徹、能ク人ノ言ウク（あた）ハザルトコロヲ言ウ。忽（たちま）チ当代ノ大家名士ニ認知セラル。

幾バクモナク君ハ朝鮮、満州ヨリ中国ニ遊ビ、東亜ノ大勢ニ就イテ得ルトコロアリ。朝日新聞ノ論壇ニ拠リテ大イニ政治活動ヲ試ミ、自ラ東方時論ヲ興シ、更ニ進ンデ遂ニ議会人トナレリ。

君ハ同郷ノ大先輩頭山満ニ負ウトコロ最モ多ク、当初犬養木堂傘下ニ投ジ、安達漢城ニ結び、而（しか）シテ遂ニ自ラ東方会ヲ興シテ同志ノ才俊ヲ糾合シ、議会内外ニソノ勢力ヲ開張セリ。



鳥飼八幡宮境内に立つ中野正剛先生の顕彰碑⑤と銅像

1面から続く

君ノ弁論ハソノ文章ニ
優ルトモ決シテ劣ルトコ
ロナシ、疾陀雲ヲ興シ痛
快肺腑ヲ穿ツ。

君ハ議會ニ於テ反対党
タル田中内閣ヲ倒シ、更
ニ自党タル若槻内閣ヲ総
辭職セシム。君ノ党人ト
シテノ官歴ハ逋信政務次
官ニ止マル。シカシ議會
人トシテハ実ニ一敵國ノ
看を倣（な）セリ。

君ノ政界ニ於ケル進退
行藏ハ常人ノ諒解シ克
（あた）ハザルモノ鮮（す
くな）カラズ。シカモ君
ハ既往ニ捉ラハレズ執一
ノ見ニ縛セラレズ、文義
ニ泥（なず）マズ、タダ
國家ノタメニ当面ノ必須
トスル標的ニ向ッテ驀進

外遊ノ志ハ真ニ一世ノ知
君慷慨卓厲真ニ一世ノ知
シテ自裁ノ方式態度悉ク皆
局者ニ最後ノ打撃ヲ與ヘタ
自カラ其ノ責ニ任シタルナ
友慈愛一トシテ間然スル所
ニ聞セス交情始終渝ラス君
正敬撰 門人進藤一馬謹書

碑石の背面に刻まれた顕彰の言葉(部分)

ス。故ニソノ所信ヲ断行
スルニ当タリテハ、世上
ノ毀譽褒貶ヲ顧ミズ、一
身ノ利害得喪無視シテ猛
然コレニ趨（おもむ）ク
ノミ。

シカモソノ志恒ニ君國
ニ存シ、専ラ東亞ノ興隆
ヲ図リ、自ラ世界諸民族
ノ水平運動ノ唱首タラン
コトハ、君ガ始終一貫
シタル精神タラズンバア
ラズ。

君ヤ第一次世界大戰ニ
際シ英國ニ遊ビ、巴里会
議ニ際シ仏國ニ遊ビ、更
ニ第二次世界大戰前ニ於
テ独伊諸邦ニ遊ブ。ソノ
三回ノ外遊ハ君ヲシテ世
界的活眼者タラシムルニ
タルモノアリ。

君ハ第三次外遊ニ際
シ、同郷ノ先輩頭山立雲、
岳父三宅雪嶺、及ビ老友
予を迎ヘテ星ヶ岡茶寮ニ
留別の筵（えん）ヲ催セ
リ。今や座中ノ主客剩（あ
ま）スモノ予一人ノミ。

当時君慷慨卓厲（こうが
いたくれい）真ニ一世ノ
智勇推倒シ、万古ノ心胸
ヲ開拓スルノ慨アリキ。
而シテ帰来大東亞開戦
ニ際シテ当局ノ措置君ト
相協（あ）ハズ、遂ニ君
ヲシテ自裁ノ極所ニ至ラ
シム。モシソレ君ノ死生
ノ際ニ於ケル従容自若、
而シテ自裁ノ方式態度悉
（ことごと）ク皆古武士
的典型ニ遵（したが）ウ。
コレヲ知ル者誰カ君ノ人
生ノ大道ニ於テ、ソノ悟
入ノ真且ツ深ヲ諒トセザ
ルモノアランヤ。

レガタメニ君ハソノ禍機
不測ノ方面ニ波及センコ
トヲ慮（おもんば）カリ、
独リ自ラソノ責ニ任ジタ
ルナリト。シカモソノ眞
相如何ハタダ天コレヲ知
ルノミ。

君ヤ平生大塩中斎、西
郷南洲ニ私淑シ、王陽明
ノ知行合一ノ説ヲ服膺
（ふくよう）ス。君ヤ実
ニソノ学ブトコロヲ行フ
ニ幾（ちか）シ。

君ノ家庭ハ実ニ理想的
ナリキ。孝友慈愛一トシ
テ間然スルトコロナシ。
夫人三宅氏聰慧貞淑君ニ
先（さきだち）テ逝ク、
君再ビ娶ラズ。操行清淨
亡夫人ノ靈牌ト同栖スル
ノミ。

平生ノ嗜好、曰ク養士、
曰ク乗馬、曰ク読書。同
郷ニシテ同学ノ親友緒方
君竹虎、君ト政見ノ異同
関セズ交情始終渝（かわ）
ラズ。君逝クヤソノ後事
ノ經紀専ラソノ力ニ頼
（よ）ル。銘（めい）ニ曰ク。

蟄龍在山 降遊人寰
一朝神變 飛翔雲間
友人 蘇峰徳富正敬撰
門人 進藤一馬謹書

筑前風濤録

<22>

頭山滿と玄洋社

柳 猛直

試練の時代

それは平野国臣に対する処遇や藩内勤王派の弾
圧といった藩主独裁型の強硬策となつてあらわれ
てくる。

筑前藩は平野国臣以外は、いわゆる草莽（そう
もう）の志士といわれる人は、ほとんど出ていな
い。

「草莽」とは「草むら」のことで「草莽の志士」
は藩の拘束から脱して義に生きる者を指し吉田松
陰の「草莽崛起（くつき）群れを抜いて出ること」
の論」あたりが原点である。

平野は草莽の志士の典型であつた。後年、玄洋
社の人々が平野国臣を郷土の先覚として高く評価
し尊敬したのは在野の国士としての深い共感があ
つたからだろう。

文久二年四月、参勤の途中、播州大蔵谷から引
き返した藩主・長湊の供に加えられた国臣は筑前
に帰ると、そのまま脱藩の罪で牢に入れられてし
まう。

越えて文久三年、京都で尊攘派の勢いが盛んに
なると三月には平野は許されて牢を出る。朝廷か
らの口添えがあつたのだといわれている。

平野国臣が桝木屋の獄を出て地行の自宅に帰っ
ていた文久三年五月、尊攘の志を持つ高原謙次郎

題字は進藤一馬福岡市長

筑前琵琶保存会 定期演奏会を開催

急逝の前会主を追悼

筑前琵琶保存会（寺田蝶美会主）の第五十六回定期演奏会が、昨年十月十七日、福岡市中央区大濠公園の「大濠能楽堂」で開催された。前回定期演奏会の一月半後に急逝された前会主、青山旭子師の追悼公演としての開催だった。

一部と二部に分けて、博多（福岡）発祥、筑前琵琶の、伝統の音色十三曲が披露された。時には激しく、時には寂しい琵琶の曲に、初めて琵琶の演奏を聞いたという来場者も「こんなに素晴らしいものとは知らなかった」と感動の面持ちだった。



「どんたく隊」も登場したフィナーレ

演奏会のフィナーレでは、新型コロナウイルス禍の終息を祈念して「元禄花見踊り」と「弥栄（いやさか）博多」が、同保存会会員十二人と同会の指導を受ける福岡教育大学の学生五人も加わり、にぎやかに披露された。

「弥栄博多」では、同会が例年、参加する「博多どんたく」の参加旗を手にした同会会長、麻生

渡氏（元福岡県知事）を先頭に、どんたくの「通りもん」が橋懸かりから舞台まで練り歩き、コロナ禍で中止になったどんたくの雰囲気再現した。

青山旭子師は、毎年五月に玄洋社記念館が斎行する「廣田弘毅先生顕彰祭」で、長年にわたり筑前琵琶を献奏してくださっていた。コロナ禍であらゆる行事、催事が中止される社



演奏する寺田蝶美会主

会情勢下で、同会は定期演奏会催行の是非を検討したが、ぜひ青山師の追悼を、という思いと、青山師が会場を予約していたご遺志に因應するために、と開催を決断した。

演奏会では青山師の故郷、福岡県二丈町の情景をイメージした「海の風景」など青山師作曲の三曲が演奏された。

青山師は、前回の定期演奏会の挨拶で「来年もここですますから、ご来場を」と呼びかけておられた。

会場は約五百九十人収容できるが、当日の観賞者は間隔を取って百八十人に限定された。検温、手指消毒などコロナ感染予防策が徹底された。

という二十七歳の青年が尋ねてきて平野の話を知っている。

高原は、のちに郷土史の研究家として知られることになるのだが平野を訪ねた時の思い出を語っている。

この時、平野は「まだ引きこもり中だけど会おう」と言ってお酒をもち出した。

さかなは何もないので卵を割って、これをさかなにして飲んだのだが、平野は「自分は所々を遊歴して多くの人に会ったがその中でも鹿児島の人郷吉之助という人は容貌といい知識といい、この人こそ天下の英雄であろうと思った。その次に大久保市蔵（利通）という人がいる」というようなことを話した。

平野は酒も女性も好きだったが諸国遊歴中は不自由はしなかったようで、志士の隠れ家として知られる下関の白石正一郎邸に女性を連れてきた両横綱は平野国臣と高杉晋作であったという。

平野の一生は激しい浮き沈みであった。榎木屋を出て生卵をさかなに、わびしい酒を飲んでいたころは「沈」の底であったが、その直後には本人も驚くほどの「浮」の時代がやってくる。

朝廷の要請によって藩命を受けて上洛することになるのである。こんどは脱藩の浪士とは打って変わって大手をふつての上京である。八月十六日には学習院出仕に任命される。朝廷の国事係である。足輕出身の平野にしてみれば破格の出世であった。自分でも「あまり高名に相成り気の毒なることどもに御座候」と言っている。きまりが悪いくらいだ、というのだ。

ただし、この二日後には尊攘派一掃のクーデターが起こって平野の境遇はまた「沈」に一転する。

（この項続く）

西郷隆盛は

征韓論者にあらず

⑨

〔昭和六十一年四月発行「玄洋」特別号外版より再録〕

誤認の歴史を改めさす為

<8>

葦津 珍彦

ここで云う西郷の道義外交論が、決して明治六年の政治家の感情や思いつきではなく、深い根底を有していたのは、明治八年に、日本の海軍が、江華島で韓国に対して、艦砲射撃を浴びせた時に、門弟の篠原冬一郎へあてた書状を見ても明らかである。

（一）新しい、紛議を生じて五、六年も談判に及び、今日結局のところ立ち到って、全く交際もなく、人事も尽さないで来た国と、戦端を開くとは誠に遺憾千万だ。たとえ、この戦争を開くにもせよ最初測量のことをこわり、先方がそれを承諾した上で発砲した



西郷 隆盛

のであれば、我が国に敵する者とみなす事もできるが、そのこと（承諾）なくして先方が発砲したとしても、一往は談判すべきで、何の趣意でこのようなことになったのかぜひ糾すべきことと思ふ。ただ先方を蔑視して、先方が発砲したから、こちらも応砲したといふの

では、これまでの（日韓の）交誼の上からも実上天理に恥すべき行為である。云々）
として日本側の戦闘行為を天理の正道に反するとして非難している。その後には、外交上の西郷の所信と政府への疑惑を述べている。西郷の「思想の論理」は、すぐれて終始一貫している。西郷は、外交では相手が弱いからと侮つたり、相手が強悪だからとて恐れるというのは決してよくない。ただ天理の正道によるべきだとの礼節道義外交論である。それは現代流の絶対無条件的平和論ではない。こちらから相手を弱くして見るの非道侵略は、絶対に許せぬが、

相手がいかに強暴であるからとて、強暴者の威圧や干渉に対しては、いつでも毅然として抵抗して居せぬ勇氣と威信とがなくてはならない。国際外交が、強弱の暴力によつて支配されてはならない、あくまで天地の正道を第一義とせねばならないとの主張なのである。

この東洋的な道義第一主義は、少なくとも当時の国際政治の現実とは遠く、実力ある者が「国利」を得るというのが当然とされていたのが西欧列強のパワー・ポリテックスだった。それは国際政治の現実で、例外のない法則でもあった。大久保は、この現実政治の中で、日本の独立発展のために、その法則をマスターして「国利」を守らねばならないと確信した。

西郷も政治を考える以上「国利」を無視するのではない。正道の国政とは、天下の公民の利と權利とを保護することなくしてはならないし、それには「国家利益」を無視することはできない。しかし「利か義か」との優先順位において、西郷は断然として道義の正道を第一義として優先させるところに、西郷は、西欧近代よりも遙かにすぐれた東洋近代外交の理想を確立せねばならないと信じた。この二者のいずれを優位に置くかとの政治哲学は、しばしば国の根本コースに決定的な岐れ道となるものである。

日本の大衆の中に、今も西郷という巨人が明白な論理づけもなしに、憧れを感じさせるのは、この西郷の気風なのではないか。

利と義とが対立する時には、決然として「利を棄てて、義をとれ」との西郷の対韓外交の理想は、東洋の伝統的理想であるのみでなく、世界のものとなるべきものと思う。

その理想を、ただの評論でなく重大な政治生命をかけて主張し敢闘した西郷隆盛が、それと全く相反する侵略的征韓論者と誤認されているのはまことに残念である。ここ

にはたゞ明白なる第一版史料を掲げるのみで、その誤認を改め正すべき論証の大綱を書いてみた。（完）

◇

筆者紹介 明治四十二年福岡に生まれる。主な著書に「大アジア主義と頭山満」（日本教文社）「日本の君主制」（神社新報社）「明治維新と東洋の解放」（新勢力社）「神道的日本民族論」（神社新報社）「武士道・戦闘者の精神」（徳間書店）「永遠の維新者」（二月社）など。平成四年歿。

※葦津珍彦氏の「誤認の歴史を改めさす為」は、今回で終了致しました。次回からは木俣秋水氏の「近代史家たちの怠慢と偏見の結果だ」を掲載致します。

木俣氏は明治四十五年、京都市の生まれ。掲載予定の原稿の執筆当時は京都市会議員。同市会議長も務められました。平成三年歿。著書に『史観・吉田松陰』などがあります。

賛助会員芳名録

(令和2年9月28日受け付け分まで・敬称略)

▼個人の部

【二万円】

竹若 晴喜 (福岡市)

柴田 文彦 (同)

小柳 政則 (同)

有馬 學 (東京都)

橋田 文也 (福岡市)

島津 修久 (鹿児島市)

伊東 聰江 (東京都)

山村 賢三 (太宰府市)

稲富 修二 (福岡市)

コロナ禍中の初詣
分散参拝を呼び掛け
感染防止に知恵絞る

神社

秋篠宮さまの「立皇嗣の礼」も済み、新しい年、令和三年の幕が開いた。

通常なら慶祝ムードに包まれるところだが、今年は新型コロナウイルス禍の終息が見えず、警戒の手を緩められない。

新春最大の行事「初詣」の参拝客を受け入れる諸

方の神社は、コロナ感染防止に「密」を避けるため、正月三が日にこだわらない「分散参拝」を呼び掛けている。

例年正月三が日で二万人の参拝客が訪れる福岡県太宰府市の「太宰府天満宮」は昨年十月初めに早々と「分散参拝」を呼び掛けた。

続いて同県内約三千三百の神社で構成する「福岡県神社庁」も「分散参拝」を呼び掛け、小川洋県知事に県民への周知を求めた。

神社関係者は「来年は参拝した日が初詣と思っていただければいい」と言っていた。

参拝客への呼び掛けの一方、神社自体も感染防止策に知恵を絞っている。

玄洋社記念館が例年五月に斎行する(昨年はコロナ禍で中止)「廣田弘毅先生顕彰祭」で司祭をつとめてくださる「福岡県護国神社」は、昨年九月から参拝客、神社職員双方の感染防止対策の検討を始めている。

第一は、参拝客の「密」を避ける対策。

同神社は、正月、おさい銭箱を三台設置している。これを四台増やして七台に。参拝客の列を分散させたいという。「宮大工さんに頼めば費用もかかる。神社の職員の手造りです」

手洗舎のひしゃくも取り除かれる。例年、好評の樽酒の振るまいも、酒器の使い回しはできないからと中止になる。

お札、縁起物授与所の巫女(みこ)さん全員、フェースシールドを付けて参拝客に接待する。「昨年の夏から準備していました」と同神社。

私たちが経験したことのない新春が穏やかに過ぎることを願うところだ。

謹んで
新年のご祝詞を
申し上げます



丑
令和三年元旦

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・設計・施工管理
ジーン・アンド・エス・エンジニアリング株式会社
会長 花田 和久 勲

代表取締役社長 児玉 和久
本社 福岡市博多区東比恵三丁目二四一〇九
〒八二・〇〇七 電話(092) 48113100
東京支社 東京都杉並区高円寺南一丁目三三
〒一六・〇〇三 電話(03) 537815800
営業所 千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!! 21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇

株式会社 アキラ水産

代表取締役会長 安部 泰宏

AKIRA
Oh, Fresh! Sea foods.
本 社 福岡市中央区長浜3丁目11-3111
電話092171116601(代表)
関連会社/株式会社コウトク水産

損害保険コンサルタンツ
太宰府天満宮前駐車場
漢方薬相談 とおりやんせ

(有)日産企画 大江田 信
薬剤師 大江田 美子

〒818-0117 太宰府市宰府三丁目四十二
〇九二一九二四一六二九六

造園・緑化 自然とコミュニケーション

株式会社 別府梢風園

代表取締役社長 別府 壽信



本 社 〒815-0025 福岡市東区青葉一丁目六・一五三
TEL 〇九二一六九一・一〇六七八代
FAX 〇九二一六九一・四一五五四
E-mail: info@shouten.co.jp

(財)日本医療機能評価機構認定

開放型病院・臨床研修指定病院

HARADOI HOSPITAL
原土井病院

理事長 原 寛

〒813-8588 福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第80回

同時代から見た頭山満

―書と人物―

(24)

「雲を斬る」の薄田斬雲が「雲に立つ」の頭山立雲について語っている

（「東湖と頭山満翁と」、薄田斬雲『人間東湖先生』照文閣、昭和十七年（一九四二））。東湖は水戸藩の学者藤田東湖のこと。この部分は藤田東湖と頭山満を比較したものだが、親しく頭山満に接した薄田斬雲が頭山邸の様子を語っているところ

が興味深い。ウィキペディアによると、薄田は「一九一七年（大正六年）」には衆議院議員野田卯太郎、頭山満、子爵で法学博士の田尻稻次郎らの組織した大民団（大民俱樂部）に加わり山田三七郎とともに運営本部の任にあたった。」薄田斬雲の著書に『頭山満翁の真面目』平凡社、昭和七年（一

九三二）、『頭山満翁一代記』岡倉書房、昭和十二年（一九三七）がある。（引用に際し、少し表記を変えている。：は省略部分）

「早起きの頭山翁は、五時前に床を払うのであるが、訪問客は朝飯前から押しかける。『新聞も読ませない』と頭山翁は苦笑している。：一介の野人、無位無官：苦笑している頭山翁の処へ、こんなに多くの客が見えろと云う事は、真に異数とすべきで、是等の客はそれぞれ特殊な知見、ニユースを語るのので、翁は之によって、生きた書物を読んでいるのである。：

『おれは不精じゃ』と頭山翁自白して、―

「人に話をしてやるのも面倒だから、おれの手を書くのは、皆なまた聞きじゃろう。おれは手紙の返事も減多に書かんのじゃ」と言う。」

◆ こんなふうだから、頭山満の手紙で私が所持しているものもあるが、これが真筆か、代筆かの判断が難しい。筆跡は明らかに違うのだが、頭山満も若い頃はふつうに習字のお手本のような文字を書いていたのだらうと思

◆ 「頭山翁も、在野志士の総元締である。日本のみに存在する浪人道の本尊である。今日、右傾派とか、頭山党とか、国粹主義者とかに属すると見なさる顔ぶれで、常盤松（―渋谷区）の頭山翁邸の床の間に横たえられ、又は立てかけられている無数の刀剣に憧れの目を注がぬ者はなからう。」

◆ 無造作に積み上げたはずはないから、「無数の

刀剣」は大きさが、頭山満は日本刀の技術伝承を保護し、頭山邸内に刀匠の日本刀鍛錬所（刀剣研究所）もあった。

◆ 「翁は、二階八畳の座敷に、すべての訪客を迎えて、公平に、平等に、座布団と、一杯のお茶を供して、喜怒哀楽色に現れざる顔容を示している。翁の前には久留米竹細工へ漆を塗った精巧な大机（―藍胎漆器である）が据えられて、その上には、書籍、雑誌、新聞、来信、印刷物など、乱雑にうずたかく積み

◆ その間に翁の眼鏡が三種混在して、いつも、『あっちの眼鏡はどうした、もひとつの方がどこぞにないか？』と、婢女をして、その混雑した机のうえからの眼鏡さがしに困ぜしむるのである。この二階八畳はいわゆる応接間でなくして、頭山家の本座敷と見ておく、下座敷はかえって半物置の形を為しているのである。

◆ されば、この二階八畳

の本座敷に請ぜられて座に着く客は、まずこの机上の雑然たる積み重ねに度肝を抜かれるのである。：この机上には、何かの依頼者の置いて行つた印刷物があり、ちよつと目を通して置きたいと思ふパンフレットがあり、何か記念の小品があり、備忘の書き付けがあり、来訪者の名刺があり、たまには返信をしたためねばならぬ種類の来信があり、写真があり、書画帖があり、これをどう始末してよいか当惑せざるをえないのである。

◆ そしてこの乱雑な机の前に頭山翁は不動（―動かざること）山の如く泰然と行儀を崩さず端座して、入り替わる客の話を聞いている。別の応接間に待たせろという事なく、わが居室へ客を通すのであるから、座上客常に満つるのである。：

◆ そしてご自分

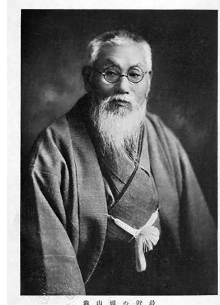
◆ が、そんな無雑作、無頓着であるから、どんな、ひどい服装をした者も、本人が無頓着に翁を訪問すると、そのひどい泥足のままで、この座敷へ迎えられて、絹の座布団へ座らせられるのである。」

◆ このようにある日の頭山邸の様子が活写されている。机の前で終日正座して身じろぎもしない頭山満の姿はしばしば写真に撮られている通りだ。

薄田斬雲はこんな頭山満の言葉を書きとめて「俺の家を化け物屋敷とでも思うとるかし

て、よく化けものが来ると頭山翁は、その多種多様の来客の事を語る」。

◆



写真は左が『頭山満翁の真面目』、右が『頭山満翁一代記』の口絵（近影）。右に添えられた頭山満の自署は、よく扁額などに見るもの。違って、竹筆でもないし線が鋭角的である。いろいろな字体を書けることを示している。